



第1回 知的障がい者日韓スポーツ交流プログラム



協力:スペシャルオリンピックス日本 日本体育大学 協賛:JTB グロリアツアーズ **SPORTS BULL**  canterbury

後援:公益財団法人 知的障がい者スポーツ協会 日本パラリンピック委員会 全国特別支援学校知的障害教育校長会

実施報告書



(C) SPORTS BULL

平成 29 年 9 月

知的障がい者日韓スポーツ交流プログラム実行委員会

はじめに

「第 1 回知的障がい者日韓スポーツ交流プログラム（以下、同プログラム）」は、2015 年 9 月に南米エクアドルで行われた第 4 回 INAS グローバルゲームスに日本より参加した 5 競技団体（バスケットボール、フットサル、卓球、陸上競技、水泳）に対して、韓国選手団代表より日韓スポーツ交流プログラムの提案があり、アジア地域における知的障がい者スポーツの発展に日本と韓国が互いに協力していく方針を確認した事に端を発しています。

同プログラムの実現にあたり、2016 年 7 月下旬に韓国側の代表が来日され、両国の実務者間においてスケジュール等の調整が行われました。しかしながら、様々な事情により同年における同プログラムの実施には至りませんでした。その後も、両国が粘り強く交渉を重ね、2017 年 6 月、今度は日本側スタッフが韓国へ赴き、昨年行われた協議の課題等を整理し、2017 年 9 月（今回）に同プログラムが実施される運びとなりました。

同プログラムの実施に際しまして、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会と全国特別支援学校知的障害教育校長会よりご後援をいただき、スペシャルオリンピックス日本及び日本体育大学のご協力の下、(株)JTB コーポレートセールス、(株)グロリアアーツ、(株)運動通信社（スポーツブル）、(株)カンタベリーオブニュージーランドジャパン各社のご協賛をいただき、更には通訳を含む多くのスタッフや学生ボランティアの方々のご協力やご尽力があって実現されたことに感謝申し上げます。

本プログラムのような草の根的活動は日本政府が進める Sport for Tomorrow^{*} の精神に準拠したスポーツ国際貢献事業であり、来年度以降も継続していくことに大きな意味を成すと考えます。そのために両国は、不断の努力によってこれを保持し、とりわけ日本におきましてはスポーツを通じた知的障がい者スポーツの普及・発展に寄与することはもとより、知的障がい者スポーツの価値を高める活動として一翼を担い得る事業であると思いません。

最後に、今回の実施にあたり、フットサルに関しましては、韓国側のスケジュールが合わず来日できなかったことと、水泳に関しましては一般社団法人日本知的障害者水泳連盟の大会と重複したことから、水泳連盟からのコーチ・選手のスケジュールが合わず不参加となりましたが、スペシャルオリンピックス日本及びスペシャルオリンピックス日本・東京のご協力を得て水泳のアスリートの参加も得られました。2018 年 11 月に韓国で実施予定の「第 2 回知的障がい者日韓スポーツ交流プログラム」においては、更に多くの知的障がい者スポーツ競技の参加と日本と韓国を中心とした参加国の増加など、発展的にアジア地域における知的障がい者スポーツが振興することを願っております。

第 1 回知的障がい者日韓スポーツ交流プログラム実行委員会
実行委員長 野村 一路

*) 東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される 2020 年までに、官民連携のもと、開発途上国を中心と

した 100 カ国・1000 万人以上を対象に推進されるスポーツ国際貢献事業です

1. 日程

<9月8日(金)>

金浦国際空港発 09:00⇒11:05 羽田国際空港着⇒羽田国際空港到着後⇒(バス移動:昼食バス中)⇒日本体育大学(健志台キャンパス着) 14:00 着⇒コンディショニング(トレーニング) 15:00~16:30⇒レセプション 18:15~20:30

※コンディショニング及びレセプションは、韓国選手団のみ

<9月9日(土)>

09:00~09:15	開会式
09:15~09:30	移動・準備
09:30~12:00	交流プログラム(午前の部)
12:00~13:30	休憩(昼食)
13:30~13:45	移動・準備
13:45~16:30	交流プログラム(午後の部)
18:30~20:00	夕食(選手のみ)
18:30~20:45	MTG 及び夕食(スタッフのみ)

<9月10日(日)>

日本体育大学(健志台キャンパス発) 09:00⇒10:15 JISS/NTC 着⇒施設見学 10:30~12:15⇒(バス移動)⇒13:00 大江戸温泉物語着⇒文化交流及び昼食 13:00~16:00⇒大江戸温泉物語 16:30 発⇒17:00 着 羽田国際空港⇒空港内で夕食⇒19:55 金浦国際空港へ

2. 各競技団体より

<バスケットボール(専務理事 小川直樹氏)>

1) 実施した交流プログラム内容

【午前】9:45~12:00(日本人選手9名、スタッフ9名、韓国人選手8名、スタッフ2名)

プログラムを始める前にコーチ陣を紹介し、午前中の練習メニューを選手に伝えた。

午前中はファンダメンタルドリルを中心に実施。

①ウォーミングアップ②ストレッチ③ドリブルドリル④パズドリル⑤シュートドリル
⑥ブレイクドリル ⑦シュート競争

【午後】午後はスクリメージ(試合)とし、日韓分けてのフルゲームではなく、10分×2本を日韓戦、残りの10分×2本を日韓混合メンバーに編成し実施。

日本 35	$\left(\begin{array}{c} 18-7 \\ 17-14 \end{array} \right)$	21 韓国
-------	---	-------

2) 得られた成果

- 何はともあれ日韓の交流が初めて実現出来たことが最大の収穫であり、今後未来永劫に発展しながら継続されることを期待したい。韓国側のレベルが当日までわからず、ドリルの組み立てやゲーム進行にも不安はあったが、特段問題は起きず、「交流」という観点からは日韓の選手、スタッフも緊張無く笑顔で対応出来た。選手間でも言葉は通じないが、ハイタッチやボディランゲージでコミュニケーションを取る姿も見られた。コーチ、スタッフは積極的にコミュニケーションを図り、競技団体として今後韓国側と事業展開をしていく方向性で話を進めた。かなり現実的な話になり、今後詳細を詰めていきたい。
- INAS Asiaの中では1つでも競技を実施している国を増やしたいことから韓国をはじめとして今後、台湾、香港、マレーシア、また、オセアニアのオーストラリア、ニュージーランドを含めれば大きなマーケットになることは間違いない。

3) 全体を通じて (まとめ)

日程的に1日しかないので仕方がないが、他の競技団体との交流は図れなかった。

4) 今後の課題や展望

今回は予算的な問題で、東京・横浜に在住する日本代表候補選手を派遣したが、次回開催が韓国であることからフル代表を派遣するのか否かの検討が必要である。また時期的にも障がい者国体が前月にあることから、選手の所属先のコーチ、保護者等とも確認が必要になってくる。当連盟としては育成枠のU-18の派遣も視野に入れることで検討を開始する。

<陸上 (コーチ 秋谷昌義氏) >

1) 実施した交流プログラム内容

【午前】 今回の内容は全て日本 (ホスト) 側の主導で行なった。

9:20 開式 (①自己紹介 ②注意事項の確認 ③基本的な考え方の確認:今回は人数も実力も違うので、対抗戦ではなく合同練習会である。)

9:50 練習開始 ウォーミングアップ (ジョギング400m、体操) 休憩

10:20 ドリル (ニーハイウォーク、ランジ、トロツティングなど) 休憩

10:45 ウィンドスプリント (流し) 休憩

① 30m×2本 ②60m×2本 (スパイク着用)

11:30 終了 食堂へ移動

【午後】

13:50 練習開始 ウォーミングアップ (ジョギング、体操、簡単なドリル)

- 14:25 ウィンドスプリント ①50m×2本 ②50m×2本（スパイク着用）
14:45 スタートダッシュ（ブロックを使用）
① 各自で調整 ②（雷管を使用）30m×3本 ③60m×2本
15:35 グルーピング（全12名を3チームに分ける）各チームでリレーを行うための作戦
会議 バトンパス練習 4×100mリレー
16:05 クールダウン（ジョギング、体操）
16:15 閉式（全員が感想を言う）

2) 得られた成果

外見は日本人と変わらない選手が、全く違う言葉を使っている。それを通訳の方が日本語に訳してくれる。その瞬間、日常とは違う経験なのだと実感をした。知的障がいの方々是一般の方に比べ、他国の文化に触れることが少ないと感じていた。この通訳を介するコミュニケーションも、普段できない貴重な体験であった。選手たちは自己紹介の直後から、言葉を越えたコミュニケーションをとることができていた。

3) 全体を通じて（まとめ）

- 初めてのことで、なかなか内容が見えない中であつたが、「共通の競技（目標）は言葉の壁を簡単に超えることができる」ということがわかつた。日体大という充実した施設を利用することができたということも、その一因であると思う。
- 韓国側の選手、コーチは数日前に会つたばかりだとのことだったが、ホストである日本側は同一団体からの選出で、練習内容の確認や意思疎通がスムーズにできた。そのため、練習などの進行が円滑に行えた。事前に各自の記録はわかつていたが、記録の違い以上に技術の違いがあつたように思う。特にスターティングブロックを使用した練習では、日本側のコーチが個別に指導を行つた。そのことで技術的な上達が見られ、選手自身も達成感を感じることができたようである。
- 気候の違いや、旅行の疲労もあり、日本側の選手は少し間延びしたように感じたそうだが、ただ、季節的には熱中症の心配があるので、無理がないよう休憩、水分補給を頻繁に行つた。コミュニケーションの方法としては①通訳を介する方法②選手間は身振りや雰囲気③コーチ間は英語④スマホの通訳アプリ⑤ホワイトボードによる絵などであつた。

4) 今後の課題や展望

- 今回は日本側の練習方法を紹介する形にしたため、韓国側の練習も紹介しあえる形にできるとよいのではないだろうか。そのためには韓国側にも事前の準備が必要となるだろう。
- 内容の確認が遅れたため、使用する道具がないことが当日にわかつた。道具について

も確認が必要であった。

- (選手の人数によるが) 個人の競技であるため、通訳も複数名いた方が、より深い交流ができると思う。
- 韓国側ではピンバッヂを用意していた。交換の分化があるようなので、日本側も用意できると良かった。(事前の確認が必要)
- 次回は韓国側に行くそうだが、内容はもちろんだが、双方の選手の数、記録、所属団体などの打ち合わせを早い段階でする必要がある。急遽、名前をテーピングテープで表示した。フルネームでなく、ニックネームにしたことも双方の間を狭めることができた要因だろう。

<水泳(コーチ 増田絵里氏)>

1) 実施した交流プログラム内容

【午前】お互いの自己紹介後、準備運動を行い、練習を行った。

W-Up 100m (自分の好きな種目でゆっくり) -3'

W-Up 50m×4 1本目 Fr,2本目 Fr,3本目 S1,4本目 S1 -1'30"

K 50m×4 1本目 Fly,2本目 Ba,3本目 Br,4本目 Fr -2'30"

P 50m×4×2 1set目 Fr -2' / 2set目 IM -2'30"

休憩

S 50m×10 (S1) -1'30" ⇒SON・東京のアスリートは、1'45"で。

Dash 50m×1 (S1)

Dw Total 1,450m

練習メニューの内容は、韓国のコーチと相談をしたが、日本のプログラムがどのように行っているか体験してみたいという意見もあり、午前のメニューはSON・東京で行っている内容を基本においたメニューとした。時折休憩を取りながら、アスリートたちは、元気に落ち着いて練習を行うことが出来た。事前に必要備品の伝達が出来ていなかったため、当日、日本体育大学の学生さんにビート板等の貸し出しについて確認をお願いすることとなった。もう少し事前の打ち合わせを細かく行えばよかったと反省している。

【午後】午前の練習後、韓国コーチと相談し、午後は、主にタイムレースを行うこととした。

W-Up ①Kリレー ②Sリレー

午前中のダッシュの結果を踏まえ、アスリートを2組に分けリレー形式でW-Upを行った。

Aグループ 田口麻紀子、和田勇人、ビョン ギョンヒョ、井上博人、ファン ヒョンソ

Bグループ 長澤綾子、渡辺佑平、イ ボファ、キム ソンフン、別所啓

Time Race

① 200m 背泳ぎ キム ソンフン、イ ボファ

② 100m 自由形 ビョン ギョンヒョ、長澤綾子、渡辺佑平、和田勇人

- ③ 200m 個人メドレー ファン ヒョンソ、別所啓、井上博人
- ④ 100m 背泳ぎ キム ソンフン、イ ボファ、田口麻紀子
- ⑤ 200m 自由形 ファン ヒョンソ、別所啓、井上博人
- ⑥ 50m 自由形 ビョン ギョンヒョ、長澤綾子、渡辺佑平、和田勇人、田口麻紀子

Dw

着替えを終了後、お互い感想を述べて、終了。お揃いの T シャツを着て記念撮影を行った。
16 時過ぎ終了。

2) 得られた成果

同じスポーツを楽しむ仲間として、一緒に練習したことは、アスリートにとって、とても楽しい経験となった。また、50m プールという環境での練習は、なかなか得られない経験であるだけに、韓国、日本の両方のアスリートにとって、良い経験となったと考える。韓国のコーチと通訳を介しながらも、水泳という共通の取り組みについて少しでも話を出来たことは良かったと感じている。

3) 全体を通じて (まとめ)

- 水泳競技の場合、いかに「交流」するか、取り組み内容について、当初は不安であった。また、他の競技に参加する日本の競技団体のスタンスとの違いに、戸惑いもあったことは否めない。しかしながら、実際のプログラムに臨んでみると、韓国のアスリートと同じ時間を過ごすということだけでも、同じ水泳競技に取り組む仲間として、十分楽しいものであるという実感があった。
- 韓国の女性コーチが欠席となったことで、更衣室でのアスリートケアが通訳と日本のコーチにゆだねられたことにも、多少の不安があった。韓国のアスリートの情報が、まるでなかったことが大きい。どこまでを自分でできて、どこから助けが必要か、何か気を付けることはあるのか。ちょっとケアをするにしても、言葉が通じない日本側のコーチとしては、責任をもって行うことに、躊躇せざるをえなかった。コーチの欠席ということは、致し方ない部分であると思うのだが、ケアという点で女性のスタッフがついてくれるとお互いに安心なのではないかと感じた。
- 事前にもう少しアスリートの情報を把握しておくことが、コーチ間のコミュニケーションとして必要かもしれないと感じた。レースをして、終わりという内容ではなかったために、このアスリートは、負けることがとても耐えられず、パニックを起こすことがある、長時間の練習には体力が持たない可能性がある等々、キャラクターを含め互いの情報をコーチ間で共有していれば、よりスムーズにプログラムを進めることができたと思う。とはいうものの、アスリートたちも最後の感想では、「一緒に泳ぐことができて有意義だった」「楽しかった」「これからも頑張りたい」という前向きな言葉を多く口にしていたので、とても良い機会だったと感じた。

4) 今後の課題や展望

- プログラムの実施内容を明確にしておく／レースを行うという意識で来日していたとすれば、今回のメニューは、少し不満が残るものだったかもしれない。
- 会場の広さと参加人数を調整したほうがいい／プールの広さを活用できず、もったいなかった。今後「ゲーム」としての要素を強く取り組むのであれば、参加人数は増やさないと、午前午後に 2 時間半ずつの時間を飽きずに過ごすことは困難。レースと考えれば、同じ程度の競技能力のアスリートを集めることが必要だと思う。
- 他国のアスリートとの交流が今後も継続して実施されれば、より多くのアスリート、コーチが見聞を広げる機会になると思う。メディアを通じて、こうした交流の機会があることを発信できれば、障害者もスポーツを楽しむ仲間であることを、一般のスポーツ愛好者たちに広く認識してもらえる機会になると思う。

<卓球（強化副本部長 石川一則氏）>

1) 実施した交流プログラム内容

【午前】

9:00～屋外グラウンドにて総合開会式。

9:30～競技会場に移動し体育館にて簡単な開会式を行い本日のスケジュール説明、選手およびスタッフ審判員の自己紹介、記念品交換と全員で記念撮影を実施。

10:00～各自ウォーミングアップおよび練習後、男女に分かれて団体戦方式の交流試合を行い午前の部を 12:00 に終了した。

【午後】

13:30～日韓スタッフにて打合せを行った際、当初予定していた午前と同様の交流試合は技術レベル差が有りすぎるとの共通認識から韓国側の申出により、日本女子選手と韓国男子選手の団体戦に変更実施となる。一方、日本男子選手と韓国女子選手は日韓ペアのミックスダブルスの試合を実施し、午後の部を 16:15 頃に終了後に簡単な閉会宣言を行い交流プログラム終了。

その後、両国の各選手は報道スタッフのインタビューを受けて解散。

2) 得られた成果

第 1 回知的障がい者日韓スポーツ交流プログラムに参加でき、スポーツを通じて国際交流ができたことは大変有意義であった。

3) 全体を通じて（まとめ）

まず、最初のスポーツ交流がどんな形で実施されるのか判らない状態の参加でしたが、全て手作りの開催であった事など、主催された実行委員会の方々の大変な苦勞が判り心か

ら感謝いたします。

さて、日韓のスポーツ大会と思い込み韓国のトップレベルに近い選手との対戦を想像しておりましたが全く違うレベルの選手でやや肩透かしであった点は否めませんでした。とは言うものの今回の知的障がい者日韓スポーツ交流の第1回目が開催され、今後の交流の懸け橋ができた点では良かったと思います。

4) 今後の課題や展望

- 参加選手のプロフィールを紹介して頂きたい。事前にわかれば参加選手にあった派遣が可能。
- 次回以降について、スポーツを通じた国際交流と併せて、選手の競技力向上も視野に入れた大会運営をして頂ける事を期待したい。

※対戦結果は、別添参照

4. ボランティアより

大学院2年男子

私は前日と韓国選手が到着した練習日のみのサポートとなりましたが、勉強できる部分はたくさんありました。このような機会をいただき、誠にありがとうございました。

特に印象に残っていることは、日本のみならず、各国で障害のある人もない人も関わらずにスポーツをする環境が求められているということを確認できたことです。韓国の選手と直接触れ合う機会は他にありません。日本においては様々な大会のボランティアでその協議ごとの現場を見ることはありましたが、韓国の選手やコーチとお話する中で、新たな発見と自分自身への課題が見えた様な気がいたします。今回の様な取り組みは各国においても、更には世界的にもこれから益々必要となる交流ですし、その一歩目となる今回の交流に携われたことを大変光栄に思います。ありがとうございました、これから日韓のスポーツ交流が更に発展することを願っております。

大学4年男子

コミュニケーションを取れるか心配だったが、スポーツを通じて言葉が伝わらなくてもお互いに笑顔になれることがわかった。通訳の方が途中からいなくなってしまうコーチの方との会話が大変でした。障害がある無しに関わらず、スポーツは、国と言葉を超えて、誰とでも交流ができるということを間近で実感することができ、この度ゼミ活動としてサポートさせていただきました。このような貴重な経験に私にとって、新たな発見と気づきが多かった交流事業でしたので、参加して良かったと思いました。また、選手を指導するコーチの様子や方法も観察することができました。スポーツの楽しさ、障害のある無しに関わらず楽しめるということを改めて知り、次はこれをスポーツ以外の場面でも何か応用

できないかなどを考えていきたいと思います。この度はこのような貴重な経験をさせていただきまして、ありがとうございました。

大学4年女子

日韓交流プログラムのボランティアに参加させていただいて、海外の選手の方と交流ができることは滅多にないと思うのでとても貴重な経験をさせていただきました。参加して気になった点をいくつか挙げさせていただきます。

・前日からの通訳

→交流会本番の前日から韓国の選手の方は日本入りをし、健志台で練習を行いました。その時点で可能であれば通訳の方も来ていただいた方がいいのではないかと感じました。コーチの中には英語が話せる方もいましたがあまり話せない方もおり、一緒に行動する私たちがほとんど英語も話せない状態でした。韓国の選手方にとっては初めての環境でもあるし、知的に障がいのある選手方が複数人いらっしゃる中で伝えるべきことはしっかり伝えられる状態であった方がいいかと思いました。

・準備

→飲み物の配布を行うのであれば選手方が会場入りする前に準備しておくべきだと思います。要望があってから動くのでは配布が遅くなってしまうので。

・当日の流れ

→交流会当日の1日の流れが分かるようにしていただけると助かります。開会式が終わってどのように動き始めるのか、食堂の利用方法（食事を貰う場所など）、練習時間、解散方法など参加者の方から沢山のことを質問され答えられないことが多くあったので、必要だと感じました。

・必要物品

→今回健志台を会場として利用するにあたって、会場のみ借りていてその他の備品の借用はしていなかったため用意がありませんでした。

水泳会場ではビート板を使用したいとのことでしたが用意がなく参加者の方が「ビート板ぐらいはあると思ったので」とおっしゃっていました。

今回の場合であれば借用したい物があれば事前に申請が必要だということを伝え、細かく必要物品の確認を取った方がいいのではないかと思いました。

言語が違い、単語でのやり取りだったため、意思疎通が難しかったです。海外の方と関わる機会があまりなかったため、とてもいい経験になりました。

大学3年男子

今回の日韓交流を通して言葉が通じなくてもスポーツで交流を深められるところに改め

てスポーツの素晴らしさを感じました。私は今まで、外国の方とコミュニケーションを取る機会が少なかったので、今回の事業はとても良い経験になりました。韓国の言葉が分からなくても、ジェスチャーなどを使い、自分の言いたい事が相手に伝わった時は本当に嬉しかったです。この経験を今後活かしていきます。ありがとうございました。言葉の壁があっても、スポーツという素材を通じて交流を深めていく姿は障害の有無に関わらず素晴らしいことだと改めて感じました。

大学3年女子

今までこのようなことを経験したことがなく、とても良い経験になりました。スポーツを通して日本と韓国の選手が交流していて、言葉の壁や障害の壁なんて関係ないんだなと感じるとともに、スポーツの可能性を改めて感じました。

5. 通訳より

バスケットボール担当（男性）

バスケットの実力は韓国より日本が上だった。しかし一生懸命バスケットのリングへと向かう選手らは勝負より声を出し助け合う姿勢を見せながら競技をしていました。競技場では国境も障害も感じなかったし、その情熱に私は感動させられました。

陸上担当（男性）

日韓両国の選手たちが、スポーツを通じて、お互い高め合いながら、楽しく交流することが出来て、良かったと思います。

卓球担当（女性）

スポーツという言語を超えるプログラムを通して日本と韓国がもっと親交を深めた意味あるプログラムでした。選手の皆様は障がいを持ちながらも、素直で絶えない笑顔、そして頑張るといふ事にとっても感動しました。また第2回、第3回もますますプログラムが充実かつ発展をお祈りします。今回のプログラムに参加出来て、とても良い経験をさせて頂きました。本当にありがとうございました。

水泳担当（女性）

私は、開会式通訳、水泳チームの担当をさせていただきました。水泳に関しては、日本よりも韓国チームの選手が優秀で、見ている間、とても楽しかったように思います。まるでオリンピック選手のようなすばやい動きで障害を持っている選手とはとても思えないようなスピードでした。しかし途中、ゲームで負けてしまった韓国のある選手が「負けたらお母さんに怒られる！」と痙攣を起こしていたのが印象的でした。コーチがなだめていたのですが、こういった現象が知的障害を抱えて競技をする選手たちの当たり前

であるということを初めて知りました。ですが、一人で練習をするよりもみんなで練習したほうが楽しいと話す選手たちを目の当たりにし、今後もこの大会が第2回第3回と続いていくようにお手伝いできたらと思いました。

6. 総括

今回の「知的障がい者日韓スポーツ交流プログラム」は、韓国より SONG DONGKEUN 団長以下 31 名のコーチ・アスリート(内訳：バスケ 10 名、卓球 6 名、陸上競技 6 名、水泳 5 名、役員 4 名)が来日され、日本側はバスケ 17 名、卓球 6 名、陸上競技 10 名、水泳 7 名のコーチ・アスリートが参加し、日本側のスタッフ・ボランティアを含めると、トータル 101 名の参加を得て怪我等も無く、無事に日程を終えることができました。

「はじめに」にも書きましたように、このプログラムを実施するにあたっては、関係団体、協力団体をはじめ多くの方のご協力とご尽力があつての事と改めて感謝申し上げます。

このプログラムは、第 2 回は韓国で、第 3 回は日本で交互開催を実施していくことが 2 国間では確認されていますが、更に参加国数を増やし、アジア地区における知的障がい者のスポーツの振興の一助となることが期待できます。一層の関係各位のご理解とご協力を切にお願いしたいと思います。

さて今回、日本と韓国間において初めて「知的障がい者日韓スポーツ交流プログラム」を実施しました。実施にあたっては、お互いの文化、習慣、考え方の相違も浮き彫りになる中、両国の献身的な努力により実現しましたが、とにかく第 1 回を始めなければ第 2 回は無いとの思いの中、やはりスポーツは様々な違いを超えて同じ人間同士の交流に最適なプログラムであることを痛感致しました。また継続的にプログラムを実施することにより、より洗練されることを今後も期待致しますが、遠いエクアドルの地で、交流プログラムをやろうと話した時の初心を忘れることなく、知的障がい者のスポーツ機会の拡充と理解・啓発の促進、スポーツを通じたグラスルーツなレベルでの国際的な相互理解、またトップアスリートレベルにおいては、コーチ間のコーチングスキルの向上やアスリートの競技レベルの向上等、多くのレガシーを遺すことが肝要であると考えます。

また、今回ご協賛頂いております(株)運動通信社(スポーツブル)様のインターネット配信サイトに「パラスポーツ」のコンテンツがあり、ここで本プログラムのハイライト動画が配信されるようになります。知的障がい者のスポーツを一人でも多くの方に見て、知っていただき、このプログラムの発端となった「INAS グローバルゲームス」が 2019 年にはオーストラリア・ブリスベンで開催されることなども認知していただけることを期待してやみません。

最後になりますが、既に、来年の「第 2 回知的障がい者韓日スポーツ交流プログラム」にむけての準備はスタートしております。より多くの日本のアスリート・コーチが派遣できるよう引き続き努力して参ります。

実行委員長 野村一路

□大会の様子（フォトギャラリー）□

 <p>(C) SPORTS BULL</p>	 <p>(C) SPORTS BULL</p>	 <p>(C) SPORTS BULL</p>
<p>レセプション (全体)</p>	<p>レセプション (野村一路実行委員長)</p>	<p>レセプション (韓国ソン団長)</p>
		
<p>開会式全体 (全参加者)</p>	<p>開会式全体 (選手)</p>	<p>水泳 (交流プログラム)</p>
		
<p>陸上競技 (交流プログラム)</p>	<p>卓球 (交流プログラム)</p>	<p>バスケットボール (交流プログラム)</p>